



株式会社 郵愛

〒151-8502

渋谷区千駄ヶ谷1-20-6

FAX (0120)779-783

TEL (0120)025-315(自動車保険)

(0120)025-375(総合保険)

(0120)025-915(がん保険)

(0120)221-220(医療共済)



「母の日」の由来

Mother's Day

5月の第2日曜日は「母の日」です。「日々の家事や仕事を頑張る母の苦勞を労い、カーネーションやプレゼントに感謝の気持ちを添えて贈る日」とされています。この「母の日」を祝う習慣はどのようにして生まれたか、あまり知られていないのではないでしょうか。そこで今回は「母の日」の由来をご紹介します。

「母の日」の起源は100年以上前

5月の第2日曜日を「母の日」とする国は多く、アメリカやカナダ、ドイツも一緒です。「母の日」の起源は諸説ありますが、日本に伝わったのはアメリカのものです。その起源は1905年5月10日、アメリカ・ウェストバージニア州に住むアンナ・ジャービスが、平和を願う社会運動に取り組んでいた亡き母を追悼するため、フィラデルフィアの教会で母の好きだった白いカーネーションを配ったのが始まりと言われます。

日本で広がったのは大正時代

日本で初めて「母の日」のイベントが行われたのは明治末期と言われています。その後、1915年(大正4年)には国内の教会などで「母の日」のお祝いの行事が催されるようになり、1931年(昭和6年)に大日本夫人連合が結成されると、昭和天皇の皇后の誕生日である3月6日が「母の日」とされました。しかしこの時点では、正式な制定ではありませんでした。

5月の第2日曜日に制定されたのは1914年

アンナはその後も母に感謝する日を祝日にする普及運動を続け人々の共感を呼び、この活動がアメリカ中に広がっていきました。そして1910年にウェストバージニア州の知事が、5月の第2日曜日を「母の日」とする宣言をし、さらに、1914年にはアメリカ議会で正式に「母の日」と制定されました。当初の「母の日」は、「平和活動を記念する」としての側面もありましたが、商業化が進むにつれ、「母に感謝しプレゼントを贈る日」というイベントへと変化していきました。

日本で5月第2日曜日になったのは戦後のこと

戦後の1947年(昭和22年)、アメリカの文化の影響を受け、それまで3月6日だった「母の日」が、アメリカ同様に5月の第2日曜日として正式に制定されました。当初は白色、赤色のカーネーションを胸に飾っていましたが、1960年に赤一色に統一されました。赤いカーネーションの花言葉には「母への愛、純粋な愛」などの意味があるということです。



現在「母の日」は母に感謝する日として定着していますが、その起源は、平和を願う母親たちの社会運動を称え、それを記念するものだったのです。「母の日」も、その本質を知ることによって意味が一層深くなりますね。

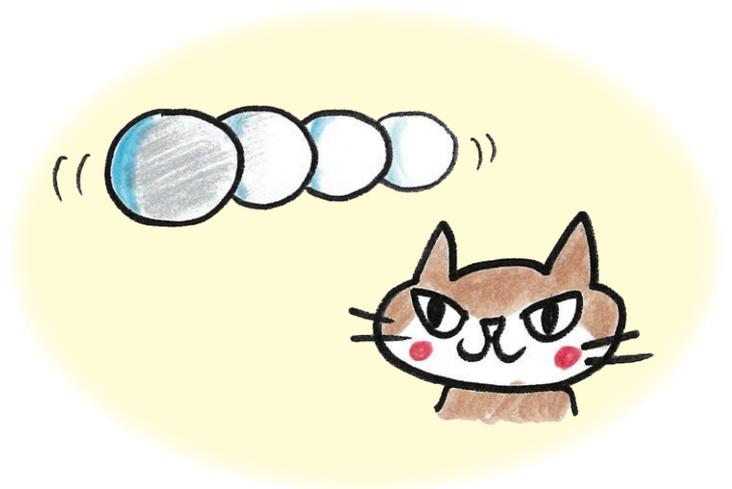


運転に必要な情報の多くは目から得られるといわれています。「交通の方法に関する教則」においても、「人間の感覚のうち視覚は、安全な運転のために最も大切」と記されています。そこで今回は、運転に係る視覚の特性や運転に悪影響を及ぼす錯視についてまとめてみました。

! 視覚の特性

01 動体視力や夜間視力は静止視力より低下する

通常、視力とは、静止した状態で静止した対象物を見る場合の視力(静止視力)をいいます。一方、運転時のように動きながら見る場合や動いているものを見る場合の視力を「動体視力」といい、静止視力よりも低下します。また、夜間などの暗い場所での視力を「夜間視力」といいますが、夜間視力も静止視力より低下し、加齢とともに低下の程度が大きくなるといわれています。特に、高齢になるとコントラストが薄いと物が見分けにくくなり、コントラストが薄れる薄暮時などの時間帯では、見落としなどの危険が高まるおそれがありますから注意しましょう。



02 暗さに慣れるには時間がかかる

明るいところから急に暗いところに入ったとき、しばらく何も見えない状態になり、やがて目が慣れて見えるようになってきます。これを「暗順応」といいます。逆に、暗いところから急に明るいところに出たときも、まぶしくて一瞬何も見えない状態となり、やがて見えるようになります。これを「明順応」といいますが、明順応より暗順応のほうが時間がかかります。つまり、暗さに慣れるほうが時間がかかるわけですから、昼間に暗いトンネルに入るときなどは十分に注意しましょう。



！ 運転時に起こる危険な錯視

人間は錯覚を起こすことがあります。視覚に係る錯覚を「錯視」といいます。例えば、図1のAとBの矢ばねのab間の長さは、Aのほうが長く見えますが、実際は同じ長さです。こうした錯視には様々なものがありますが、運転時に発生する危険な錯視の主なものを挙げてみましょう。

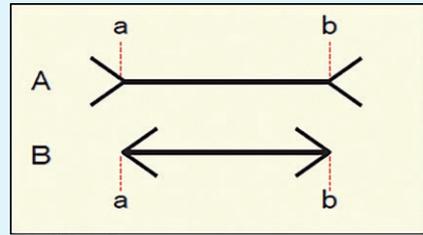


図1 錯視の例

01 上り坂が下り坂に見える

図2のように、急な下り坂から緩やかな下り坂に変わったとき、上り坂になったように見えて、アクセルを踏み込んでしまうことがあります。逆に、急な上り坂から緩やかな上り坂に変わったとき、下り坂になったように見えて、ブレーキを踏んでしまうことがあります。いずれも危険な状況を招くおそれがあります。

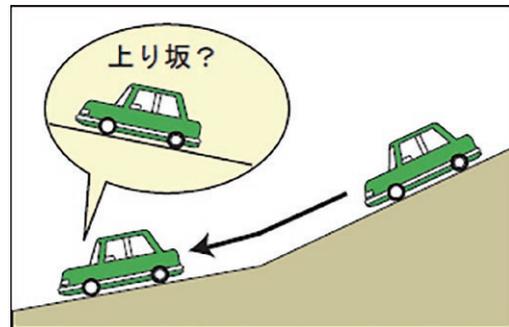


図2 下り坂での錯視

02 自車側の道路が交差道路より広く見える

信号機のない見通しの良い交差点において、自車側の道路と交差道路の道幅が同じ程度である場合、自車側の道路のほうが広く見えます。そのため、自車と交差車両がともに優先だと判断して交差点に進出し、出会い頭事故を起こすことがあります。必ず一時停止の標識や標示の有無を確認するとともに、自車側に一時停止義務がない場合でも、徐行や一時停止をして交差車両を先に行かせるようにしましょう。



03 交差道路側の車が停止しているように見える

信号機のない見通しの良い交差点に、自車と交差道路側の車が同じ速度で接近している場合、交差道路側の車が停止しているように見えることがあります(図3)。「コリジョンコース現象」と呼ばれています。そのまま交差点に進入すると出会い頭事故を起こす危険がありますから、前記と同様に、徐行や一時停止をして交差車両を先に行かせるようにしましょう。

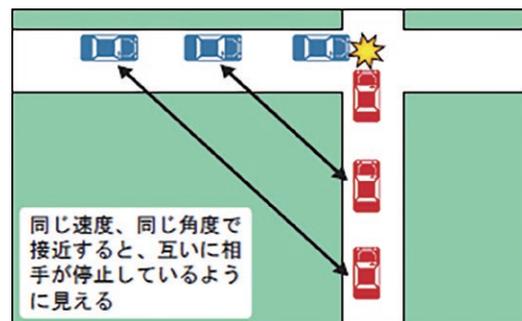
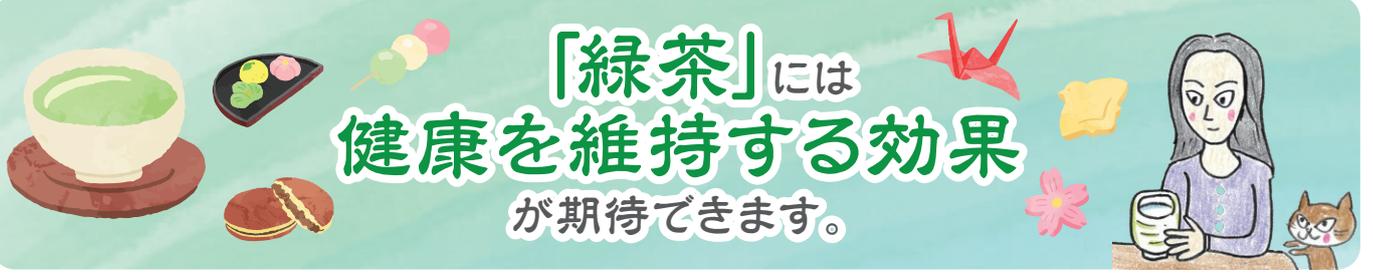


図3 コリジョンコース現象



「緑茶」には 健康を維持する効果 が期待できます。

茶摘み歌で「夏も近づく八十八夜～」と歌われるように、5月は新茶の収穫が始まります。この八十八夜は、今年立春(2月4日)から数えて八十八日を数えた5月2日にあたります。いよいよ新茶が美味しい季節の到来ですね。私たちの日常にもなじみが深い「緑茶」、おいしいことはもちろん、健康への効果・効能も注目されています。そこで今回は新茶の季節にちなみ、「緑茶」に含まれる成分と、その特徴をご紹介します。

注目の「カテキン」がたっぷり!

「緑茶」に含まれる成分の中でも、とくに注目度が高いのは「カテキン」です。この「カテキン」は「緑茶」特有のポリフェノールであり、健康に関する多くの働きがあることが分かっています。その代表的な効果は、「がんの予防」です。「緑茶」に含まれる「カテキン」が活性酸素を消去する力があり、がんのもととなる細胞の突然変異を抑える作用があると考えられるからです。また「カテキン」は、血中のコレステロールを低下させる働きもあり、緑茶を多く飲む人ほど血中コレステロール値が低いことが報告されています。さらに、「カテキン」の抗酸化作用により、病気や老化につながる活性酸素を消去する作用も知られています。

美容やアンチエイジングに期待できる「ビタミン類」

「緑茶」には「ビタミンC」がたっぷり含まれています。「ビタミンC」は、コラーゲンの生成にも必要な成分であり、美容にも役立つと考えられています。もうひとつは「ビタミンE」です。この「ビタミンE」も抗酸化作用があります。体の老化は、細胞や組織の酸化であり、シミやシワなどは細胞が酸化することで発生します。「ビタミンE」には、その酸化を抑える働きがあります。また、細胞の酸化は、生活習慣病にも関わるものであり、「ビタミンE」は、生活習慣病の予防につながる成分と考えられています。



抗ウイルス効果が期待できる「カテキン」と「ストリクチニン」

「緑茶」の「カテキン」には、抗ウイルス効果があるという研究結果が報告されています。実験ではインフルエンザA・B型はもちろん、新型の感染を抑制するという働きも認められたということです。つまり緑茶のカテキンは、これまでになかったウイルスにも対抗できる可能性があるということです。また、「緑茶」に含まれるポリフェノールには「ストリクチニン」という成分もあり、この成分も抗ウイルスの働きが認められています。

二日酔いや脳機能向上役立つ「カフェイン」

「緑茶」には「カフェイン」が含まれて、「二日酔い」にも役立つことが知られています。「カフェイン」がアルコールのスムーズな代謝に役立つからです。アルコールは体内に入ると、まず肝臓でアセトアルデヒドに分解されます。次に酢酸に分解され、全身の筋肉や脂肪組織で水と二酸化炭素に分解され、体外に排出されます。二日酔いは、肝臓でのアセトアルデヒドの分解が不十分だと起こります。カフェインは、この不十分な分解をサポートする効果が期待できるのです。また「カフェイン」には脳機能を改善する働きもあります。

このように健康づくりに役立つ「緑茶」ですが、大量に飲むことによる不眠や、肝臓損傷、血圧上昇などの副作用も報告されていますので、適量を飲むことが大切です。飲む際の茶飲みの大きさにもよりますが、朝・昼の食後や午後の茶の時間に一杯など、一日3杯～5杯ぐらいが適量と言われています。